巻頭言

# 水環境の改善とまちづくり

久保田　　勝

公害問題が顕在化してきた昭和40年代以降，全国の河川では水質汚濁の著しい進行で，「汚い，臭い，遊べない」といわれる河川が多くなった。河川を考える上で最も重要な要素の一つである河川の水質について，国土交通省では昭和33年から一級河川の直轄管理区間において調査を開始し，全国の調査結果をとりまとめ始めたのは昭和46年であった。その当時，有機性汚濁の指標であるBOD（生物化学的酸素要求量）の平均値が5 mg/Lを超え，水質改善が急務であった地点は，全調査地点（662地点）の3割近くを占めていた。

しかし，このような一級河川の水質は，これまでの排水規制，下水道整備，河川浄化事業等の推進により着実に改善されている。平成16年の調査結果では，サケやアユが生息できるような水質（BOD 75%値が3 mg/L以下）である地点は，河川の調査地点全体の9割以上となっている。

例えば，昭和40年代の多摩川は水質悪化が進み，洗剤の泡が浮く汚濁河川であった。その後，昭和50年代後半には，アユの遡上が確認されるまでに水質が改善され，近年では清流といわれている四万十川と比較しても遜色のない程度の良好な水質となっている。同様に，綾瀬川や大和川は，昭和40年代には水質汚濁が著しく，BOD 75%値で30 mg/Lを超え，一級河川の中では常にワースト5に入る河川であったが，各種取り組みにより確実に改善が図られ，特に大和川では流域住民一体となった取り組みにより，平成16年の代表地点のBOD 75%値が5 mg/L以下となり，コイやフナが生息できる水質を満足するまでになっている。

このように，BODによる調査結果では，ほとんど全ての河川で良好な水質となってきている中，河川水質の管理において，住民や利水者の河川水質・河川環境に対して多様化するニーズに応えるため，昨年3月に「今後の河川水質管理の指標について（案）」をまとめた。この河川水質管理の指標は，従来の有機性汚濁の指標であるBODのみならず，住民参加できることや人と生態系のリスク管理に対応できるなど，新たな視点で作成しており，

・人と河川の豊かなふれあいの確保
・利用しやすい水質の確保
・下流域や滞留水域に影響の少ない水質の確保

という4つの水質管理の視点別に指標のランクを設定している。この指標は，住民との協働による測定項目及び河川管理者等による測定項目からなり，今年度から全国の一級河川で実施し，地域住民の河川水質に対する理解を深めるよう役立てていく予定である。

河川の水質改善は，そこに生息する魚類などの生物だけではなく，地域社会にも大きな効果をもたらす。例えば，島根県松江市の松江堀川（北田川等9河川の総称）は，400年ほど前に松江城築城に伴い開削された水路であり，かつては水上交通網，生活用水，豊かな漁場として市民生活に欠かせない存在であった。しかし，明治以降の地形改変，生活排水の流入等により水質が大きく悪化し，松江堀川に面していた街並みも，いつの間にか背を向け，単なる排水路と化している状況であった。昭和40年代後半から底泥の浚渫や下水道整備などに地域を挙げて取り組み，確実に対策を進めた結果，平成9年から「ぐるっと松江　堀川めぐり」と銘打って遊覧船を就航させるまで水質を改善することができたのである。年間30万人以上が松江堀川遊覧を楽しむなど地域の新たな観光資源になるとともに，遊覧船の船頭には高齢者等を積極的に採用して，地域の雇用拡大や生きがいづくりにも大きく貢献している。また，松江堀川周辺の商店街など街並みと一体となった河岸や遊歩道の整備などを進め，かつての賑わいを取り戻し，まちづくりにも大きな効果をもたらしている。

水環境とまちづくりは，元来密接な関係を有しており，今後も松江堀川のように地域に愛される水辺を創出するよう取り組んでいきたい。

――くぼた　まさる　国土交通省河川局河川環境課長――